

自分の言葉で語るということ

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

文書問題の真相究明がなされないまま、兵庫県知事に対する県議会の不信任決議が可決され、斎藤元彦知事は、9月30日付で失職し、出直し知事選に出馬することを選択した。この混乱はまだ続くのか…とげんなりしているのが兵庫県民としての本音である。

◆人ごとのような言い回し

亡くなった元西播磨県民局長が作成し、報道機関等に配布した告発文書に端を発した今回の騒動では、知事の発言を議会中継やメディアを通じて見聞きするたび、丁寧な言葉で答えているものの、質問の本質を捉えた答えになっていないのではないかと、というもどかしさを感じてきた。

県議会百条委員会の証人尋問では、官僚的な、相手に隙を見せない淡々とした発言にならざるを得ないのであろうが、記者会見などでもその姿勢を崩さず、「(不信任決議が可決されたことを)重く受け止めないといけないというふうに思っています」「(県政に不安や心配を抱かせていることについて)県民の皆さんに心から申し訳ないな、という思いはあります」と、どこか人ごとのような言い回しに終始し、体温が感じられなかったのが残念だ。

「重く受け止めています」「県民の皆さん、申し訳ありません」と言ってもらえたら、もう少し「県民の方を向いて伝えようとしている」と感じられたらどう。

◆メッセージを明確に届けるには

伝わる話し方のセオリーから言っても、「～しないといけないというふうに思っています」のような持って回った言い回しは、どうしても最後まで声の勢いや伝える意識が続かず、文末が弱々しくなったり、ぞんざいになったりしがちでお勧めしない。「しっかり伝えたい」と思うのなら、一文をシンプルにコンパクトにした方が、伝えたいメッセージも明確になり、声の力強さも、熱意も届く。

確かに「自分の言葉で語る」のは難しい。そこに「自分」がないといけないからだ。自分自身を開いて、掘り下げないと自分の言葉は出てこない。だからこそ、自分の言葉で語ることが誠意であり、責任を果たすということではないか。

◆心を豊かにする言葉とは

先日、スピーチ講座で受講者にパリ五輪で印象に残ったシーンを挙げてもらい、即興でミニスピーチをしてもらった。ただし、ルールの一つ設けた。「感動した」を使わないということだ。

「〇〇選手のプレーに感動した」ではなく、「そのシーンが自分の心の琴線にどんなふうに響いたのか」「なぜ、そんなに印象的だったのか」「どのような気付き、変化がもたらされたか」「そのことを今後の人生・目標に生かしていくとしたら」などを、自分に問いかけ、掘り下げてもらった。そうすることで「感動した」だけで終わらない、自分自身の出来事として心に刻むことができるからだ。

ありきたりではない、自分自身の言葉を探すことは、自分と向き合うこと、自分を開いてみせることであり、そうして出てきた言葉は心を豊かにしてくれる。

「純度の低い正論は響きません」。先日、放送が終わったNHKの連続ドラマ「虎に翼」の終盤に出てきたせりふだ。その言葉が本当に自分に恥じない言葉であるのかを心に問い、濁りのない澄んだ言葉を選び、語りたい。このことを時代を率いていくリーダーたちにも望みたい。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003